

## どうして土器がたくさん出てくるの？

座光寺のおちこちの畑で、たくさんたくさんの土器どろびんを見つけることができます。土器どろびんや石器いかりなどは遺物いぶつと呼ばれますが、昔の人たちが使った道具です。このことは何を表しているのでしょうか。

### 土器がたくさん出てくるわけ

大正時代に飯田下伊那から招かれて各地を調査で訪れた鳥居龍藏とりいりりゆうざうという博士はくしは、座光寺の大門原遺跡だいもんげんいせきからたくさんたくさんの土器どろびんを採集し『下伊那の先史及び原史時代 図版』という本の中で、下伊那の三大遺跡の一つと注目しています。

たくさんたくさんの土器どろびんが出てくるのは、昔多くの人たちが生活していた大きなムラ（=集落）があったり、長い間ムラが営まれていたり、繰り返しムラが作られたからです。また、奈良時代や平安時代にはこの地域をおさめた役所（古代伊那郡衙）がおかれるなど、古くから飯田下伊那の政治・経済の中心地の一つでしたから、たくさんたくさんの人たちによってさまざまな活動が行われたからでもあります。



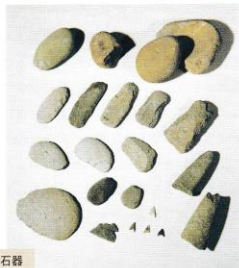
大門原遺跡のムラの跡



竪穴住居跡



土器



石器

### 座光寺にはいつ頃から人が住んでいたの？

日本にいつ頃から人がいたのか、はっきりしません。今のところ、今から少なくとも30000年より前といわれています。市内山本地区の竹佐中原遺跡たけすかなかはらいせきや石子原遺跡いしごはらいせきではその頃の石器が発掘されています。

座光寺では、飯田工業高校敷地から、今から12000年以上前の石器がわずかに見つかっています。この頃は土器がまだ使われていなかった時代（旧石器時代）で、人びとは狩りの獲物を追いながら移動する生活を送っていました。

人びとが定住するようになったのは、今から約10000年前、半木の美女遺跡うめよでその頃のムラの跡が発掘調査されています。

### 縄文人のくらし（約10000年前）

美女遺跡では、径3～4mほど円形に地面を掘りくぼめた竪穴住居、肉などを蒸し焼きにしたり燻製づくりなどをしたと考えられる施設、食料をたくわえておくための穴などが発掘されています。竪穴住居は壁ぎわに柱穴をいくつも持ち、まん中に暖をとるためなどに使われた火を焚いた跡がありました。そのほか、屋外に石器やそれを作るための材料をしまっておいた穴もあり、道具を大切にしていたことが分かります。



美女遺跡の住居跡



蒸し焼きのための施設



燻製づくりの施設か？



貯蔵のための穴



石器をしまっておいた穴

土器が作られるようになってからコメ作りが始まるまでを縄文時代じようもんじだいといいますが、その社会は氷河期が終わってしだいに温暖になっていく自然条件に適応した狩猟採集の社会といえることができます。そうした環境への適応を具体的に示すものが、土器であり石器です。土器の登場は、植物を食料として利用することをいっそう進めたといわれています。また、美女遺跡から見つかった石器には、狩りに用いる弓の矢（石鏃）、植物の球根などをつぶすための石皿や磨石、魚をとるために使われたおもり（石鏢）などがあります。



約10000年前の押型文（彫刻した棒を回転させ文様をつけた）土器と石器



### どうして何千年前の遺跡がわかるの？

土器は、時代・時期ごと、地域ごとに、作り方や文様のつけ方など一定のまとまりを持った、異なった顔つきのものが作られています。これまで行われてきた土器の研究で、このようにまとまりをもった土器の順序をあらわす「ものさし」ができていっています。また、機械を使って今から何年前のものか測る、いろいろな年代測定の方法が考え出され、見つかった土器をみれば、この遺跡が何年前の遺跡か、この家が何年前の家か、知ることができます。



約13000年前（美女遺跡）



約5500年前（大久保遺跡）



約9000年前（新井原・石行遺跡）



約4700年前（大笹遺跡）



約6000年前（美女遺跡）



約2000年前（新井原・石行遺跡）

## 縄文時代のムラの姿

座光寺ではこれまでにムラ全体が発掘された例はありませんが、他の地域の例など参考にしてお話しします。

美女遺跡で発見された約10000年前のムラは、2〜3軒が同時にある小さなムラで、何回か住居の建て替えが

行われています。

住居のまわりには蒸し焼きや燻製づくりのための調理施設があり、その外側に貯蔵のための穴がありました。けれども、住居はばらばらに建てられていて、計画的なムラ作りはなかったと考えられます。



美女遺跡のムラの跡(北は右、左下に美女下の堤、黒くめついているところが住居の跡)

中期の中頃(約5000年前)になると、大きなムラが、大きな川を望む段丘の上などに作られるようになります。中央には広場があり、そのまわりに墓や高床の建物、さらに外側に住居が円をえがいて並んでいて、計画的性をもってムラづくりが行われています。原の大門原遺跡や高岡の新屋敷遺跡などはこうした大きなムラで、使われた土器の文様から長く続いたムラと考えられます。また、狩りなどのために一時的に生活したのでしょうか、原の座光寺原遺跡など2〜3軒の小さなムラもありました。

後期・晩期(約4700〜2000年前)には、高岡の新井原・石行遺跡で住居の跡が見つっていますが、大きさはずっと小さくなっています。後期には、日本全体の気温が下がり、また、中期に植物を乱獲するなど環境破壊などがあつたため、中部地方では遺跡が減少しました。また、水場を利用するためムラも川沿いの低地に作られるようになりました。

## 縄文時代のお墓

縄文時代には、死者のいろいろな葬り方があり、円形などに掘りくぼめた穴に土葬したり、火葬したり、いったん土葬してからあらためて葬りなおしたりしています。半の木遺跡(今から約8000年前)では、底を打ち欠いた

土器が、直径約110cm、深さ約40cmの穴から横倒しの状態で見つかっていて、土器を棺おけがわりにして遺体をおさめたと考えられます。

縄文時代の中頃(今から5000年ほど前)には、幼くしてなくなった子どもや死産児の遺体を土器におさめ、住居の入り口に近いところに埋める風習がありました。埋葬とよばれるこの施設は、土器を母親の胎内に見立て、なくなった子どもの再生を願ったともいわれています。このほか、魂が遺体から離れて災いなどをもたらすことがないように願いを込め、鉢などの土器を頭にかぶせて埋葬したり、石をだかせて葬ったものがあります。



大門原遺跡の埋葬

晩期(今から2500年ほど前)には、いったん埋葬してから骨を集めて焼いたり土器におさめる再葬という習いながたが流行します。死者には、石鏃、石匙や耳飾りなどが手向けの品として副葬されました。美女遺跡から珠状耳飾りが見つっています。



美女遺跡(左)と飯島町カゴ田遺跡(右)の珠状耳飾り



半の木遺跡の土器棺

## コメ作りをはじめた頃

高岡の新井原・石行遺跡からは、長野県北部を中心に作られていた土器のほか、稲がらの跡が残る九州の影響を受けた土器が発掘されています。一緒に出土した土器は東海地方からもたらされた土器で、コメ作りは東海地方から伝えられたと考えられています。このように、はじめ天竜川の支流 近くや段丘上の縄文のムラに持ち込まれたコメ作りは、やがて天竜川沿いの低地帯を利用して本格的に行われるようになります。



新井原・石行遺跡の初嵐土器(左)と東海地方の土器

## 弥生時代の生活の様子

弥生時代の終わり頃になるとコメ作りが定着・発展し、人口が多くなったでしょう。宮崎の宮崎上遺跡、原の座光寺原遺跡や座光寺中島遺跡など、段丘の上の水を得にくいところにムラが作られるようになります。コメ作りばかりでなく、畑作も組み合わせ、積極的に段丘上を開拓していったことが分かります。また、狩りや木の実などの採集、魚とりなど縄文時代につちかわれた技術と組み合わせ、食べ物のバランスをとったり、コメなどが不作でも生活できるようになったと考えられます。



後期の中島式土器一煮たきのための壺、ものを貯えておく壺、供え物などのための高杯などがあります。(参考:上郷 橋爪遺跡)

同石器一恒川遺跡群

## ムラの姿

弥生時代の中頃になると、恒川周辺の恒川遺跡群のよう

に集中的なムラが登場してきます。終わり頃の段丘の上のムラは、畑が家のまわりにあったためか少しまばらに家がたち、座光寺原遺跡や座光寺中島遺跡のような中心的なムラや、宮崎上遺跡のような小さなムラがありました。家の近くには、墓がまとまって造られました。



座光寺中島遺跡のムラの跡

## 弥生時代のお墓

弥生時代の中頃までは、壺や甕形の土器に遺体をおさめる。縄文時代の終わりから続く再葬の風習が広く行われています。後半から古墳時代にかけては、方形周溝墓とよばれるまわりに溝をめぐらせた墓が造られるようになります。中央には長方形の穴が掘られ、棺におさまられるなどで死者が葬られ、上に低く土が盛り上げられています。また周溝墓の溝の中には、穴がけられた壺形の土器が埋められている例もあり、幼児が葬られたと考えられます。



方形周溝墓一恒川遺跡群



壺棺一座光寺中島遺跡

(馬場保之)